

2

[2013年度入試説明会講演 | 働きながらアーカイブズ学を学びませんか? — 2]

アーカイブズ学を現場に活かす^[1]

Let's Study Archival Science: From a Graduate — 2

[報告 | report]

土屋昌子 | Masako Tsuchiya

はじめに

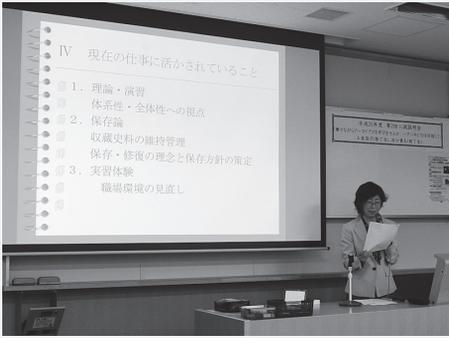
ただいまご紹介いただきました土屋昌子と申します。本日は学習院大学大学院アーカイブズ学専攻の入試説明会ということでお招きいただきました。修了生の事例紹介ということで、大学院で学んだことや、その後それをどのように活かしているかなどについて、皆様にお話しするようこのことでございます。このあと、入学の動機についても少し申し上げますが、私の場合はいわゆる社会人入学です。短期大学卒業以来、長く母校である恵泉女学園という学校に勤務しております。在学中も現在の職場で働きながら、都合4年間、ここに通いました。従いまして、大学院修了後の進路などについて就職活動をした経験はありません。そういった意味で、いま学部で学んでおられる方や、そのほかさまざまな背景をお持ちの皆様に対して、適切なお話ができるかどうかわかりません。お聞き苦しいところがありましたらお許しくださいますようお願いいたします。

これからお話しする内容ですが、大枠で4項目です。まず大学院への進学動機について、アーカイブズ学と出会うことになった直接のきっかけについてお話します。次に恵泉女学園の史料室について、私はここでぶつかった疑問、悩みの

ゆえに、アーカイブズの世界に足を踏み入れることになり、修士論文のテーマにもつながりましたので、そのあたりのことについて簡単に触れさせていただきます。3つ目としてアーカイブズ学専攻前期課程(修士)での学びについて、そして最後に現在の仕事において、それがどのように活かされているかをお話させていただきます。

1 — アーカイブズ学との出会い

わたしはアーカイブズとは関係のない分野で、20年ほどの職歴があります。出身は理系の短大で園芸学を学んで卒業しました。卒論を書きましたが、生化学の実験で植物体のアスコルビン酸の酵素作用に関する内容でした(エンゲイは「吉本系」ではなく、花や野菜を育てるほうです)。母校の実験助手として就職し2年間務めた後、進学の希望があり受験準備のために辞めました。数カ月後学校からお話があり、再び元の職場に戻り短大の女子寮に勤めることになりました。しかし、いつかどこかで勉強の機会を得られたときのためにという思いがあり、英語などの勉強を続けていました。その後、慶應義塾大学の通信教育で哲学を履修し、イギリスの園芸における色彩論の論文で美学の学位を取得しています。



転身のきっかけは2005年に、勤めていた短大の寮がなくなり、異動の辞令が出て史料室に配属されたのが始まりです。学校は、短大の廃止にあたって、戦後50年続いた短期大学の年史編纂を行うことでした。編纂委員会ができ、通史、資料編を含む50年誌が刊行されたのが2009年です。3年の予定で始まったプロジェクトでしたが2年延び、創立80年を迎える年に出版されることになりました。

この間、わたしは実務を担当し、はじめの2年間は資料整理、後半は資料集の作成に当たりました。はじめは事務仕事の延長くらいに考えて始めたのですが、やっていくうちにいろいろと仕事が見えてくると、資料の整理というのはどうも一般的な知識だけでは足りない、と思うようになりました。

一方で編纂委員会の方針に納得のいかないこともいろいろと出てきました。例えば通史は、二つの学科があったため、それぞれを二人の先生方が執筆されることになったのですが、この二人の先生の執筆スタイルがまったく違うのです。プロジェクトのなかから年史編纂という事業に対して失望してしまいました。はじめの2年間にせせと整理した資料はお蔵入りで、なんとなく傷ついた気分でしたのですが、編纂事業も終わりが見えてきた頃、もともと史料室員の方たちが別の資料の整理のため戻っていきました。それを見て、この

史料室が、年史編纂だけでなく、もともと学園の歴史的な史料を収集し、学園内外の教育活動や研究活動に役立つよう整理、保管するという本来の目的を持った組織だということに気づいたので。最初に仕事を教わった女性は、アルバイトの職域の方でしたが15年のベテランで、閉架式の書庫のどこに何があるのを知っており、データベースを準備し、キーワードから史料を検索していました。

それからいろいろ史料を眺めたりしているうちに、この史料室は20年以上の歴史があり、設置されてから関わってきた人々がその存続に誠実に努力し、全員がパートタイムとして関わりながら、専任のアーキビスト(専門家)の着任を望んでいるということもわかってきました(その方々の史料室の仕事に対する姿勢は創立者に対する敬意と母校に対する信頼と感謝に由来しています)。そのような室員のなかには日本史専攻で教員だった方もあり、安藤正人先生の著作を通してアーカイブズ学を学び、記録史料を扱う専門家の仕事に対して、理解を持っている方がいらっしゃいました。

そういう環境のなかで、2007年の秋に研修に出ることになりました。これが私のアーカイブズ学との最初の出会になります。企業史料協議会の主催する研修講座で、全7回。テーマは「経営記録を確実に保存・利用する手法を学ぶ」。研修費用が高く、たしか6万円位だったため、二人のスタッフが一講座ずつ交代で行かせてもらうことにし、研修報告やおしゃべりを通して、内容を分かち合いました。麴町の厚生会館で殺風景なビルでしたが、木曜日の午後が楽しみな2ヶ月でした。

これは、おもしろい講座でした。講座名、講師陣は、現学習院大学の安藤正人先生、お茶の水女子大学の小風秀雅先生、記録管理学会の小谷允志先生、麗澤大学の佐藤政則先生、そして国文学研究資料館の青木睦先生、フェリス女学院大学の大西比呂志先生と、今改めて眺めても、アーカイブズ学の最先端の授業を聞いているような、ぜいたくな内容でした。そしてこの研修のなかで、翌年の4月に学習院大学の大学院にこのアーカイブズ学を学ぶことのできる専門大学院が発足すること、働きながら学べるような仕組みになっているという情報を得て、心が動かされることになりました。ちなみに、大学院の入試まであまり日がなかったわけですが、受験勉強はこの講座内容と付録についていた文献目録「アーカイブズ学に関する主な図書・研究誌」が大いに役に立ちました。

2 — 恵泉女学園史料室

次に恵泉女学園の史料室の概要についてお話しします。学校は、東京都世田谷区に中高一貫校、多摩市に大学・大学院があります。創立者は1877年生まれの日本人キリスト者で、河井道みちといひます(外国人のミッションボードから宣教師がきて学校を建てたいわゆるミッション系の学校とは違い、一人の日本人女性が、女性の自立と平和な社会をめざして設立したキリスト教主義の学校)。中高1200名、大学・大学院含めて約4000名の小規模の私立学校です。

史料室は、創立50周年の年史編纂事業の前に、資料収集を目的とした委員会の発足をもって始まります。史料室を作った第3代学園長秋田稔が、河井道の学校設立以来、学校のよってきたる流れ、これを歴史と言い換えてもよいと思いますが、これを分かち合っていく、確認しあっていくという思いをこめて次のような言葉「時代によってみえにくくなったりもしているが、流れをきちんととらえよう。恵泉の新しい歴史に加わる生徒達に、学生達に、先生たちに、職員たちに、流れを伝えていくのではないか」を残しています。

主な活動は、史料保存利用機関としての一般的な業務があり、史料の調査、収集、整理、保管、管理、レファレンス、展示、と多様です。そのほか年1回の「史料室だより」の発行、座談会や講演会を企画しています。小さな刊行物を発行することもあり今年の4月には、河井道の歿後60年を覚えて、書籍集を出版しました。

人員構成は、専任1名、アルバイト(週4日から2日まで)3名が実働人数です。年3回運営委員会が招集され、各学校の代表者、総務部長、運営委員長である学園長を交えて、8名で史料室の運営について、基本的な方針を話し合っています。

次に史料室が保管している史料の例を挙げます。学園の記録は定期的な移管はされていません。理事会記録など永年保存の範囲の書類は、総務課が管理し、学籍簿や成績など学校の法令で保存が決められているものは学生課や中高事務室の管理になっています。しかしこれまで校舎の改築などを契機に、部分的に重要な文書の移管は行われており、公文書綴りや創設期の職員会議録、会計簿、学園日誌などを保管しています。河井道関係文書、史料は河井道の歿後、「河井記念室」に保管されていたもので、今も整理作業が続けられています。

学校でのレファレンスの一例をあげると、創設者と関わり



記録を守り、記憶を伝える
学習院大学大学院人文科学研究科
アーカイブズ学専攻 入試説明会

日時
10月26日(土) 14:00~16:30

会場
中央教育研究棟 303 教室

PROGRAM

第1部 働きながら、アーカイブズ学を学びませんか?
—アーキビストを目指して—
講演者: 土屋 昌子さん (恵泉女学園史料室)
坂口 貴弘さん (京都大学大学院文書館)
アーカイブズ学専攻で学ぶ意義、仕事と研究の両立について、修了後に就職で働いたことなど、修了生が共有します。

第2部 受験案内・個別相談会
どんな授業があるの? 働きながら学べるの? 修了後の進路は? など、皆さんの疑問に教授と現役学生、修了生が個別にお答えします。

2012年度入試説明会

平成26年度 春期入学試験 入試日程
出願期間: 2014年1月14日(火)~16日(木)
試験日: 2014年2月20日(木)・21日(金)

科目等履修書も募集しています。
(2013年度 科目等履修書数: 13名)
詳細は、後日大学ホームページをご覧ください。
<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/adm/adm/main.html>

学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻
〒171-8588 東京都豊島区目黒1-5-1
Tel:03-3986-0221 E-mail:gcas-off@gakushuin.ac.jp
※詳細はホームページをご参照ください。
<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/g-hum/arch/>

GCAS
Graduate Course in Archived Science
Gakushuin University

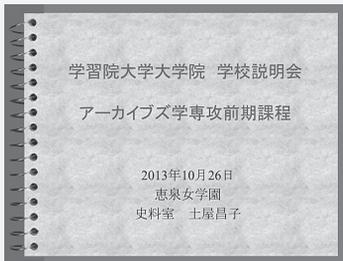
のあった井上準之助、日銀総裁や大蔵大臣をつとめた人物ですが、河井宛の書簡(1931年)が遺されています。この書簡を先日、日本史の先生が、授業のなかで高校生に紹介したいと来室されました。総合授業などでも生徒が史料室を頻繁に利用しています。

3 — 専攻での学び

続きまして、3番目の内容(本題)として、アーカイブズ学専攻についてお話しします。カリキュラムの詳細は、ご関心のあつところに沿って、配布資料を見ていただくと、学生の立場から大雑把に2年間を振り返ると、次のような流れになります。

4月に入学するとあつという間にGWですが、ここでいくつかの資料調査への勧誘があります。こういった調査に参加する機会は貴重です。なるべく多くの現場に足を運ぶことをお勧めします。私自身は当初、資料調査に対して関心が薄い者でした。

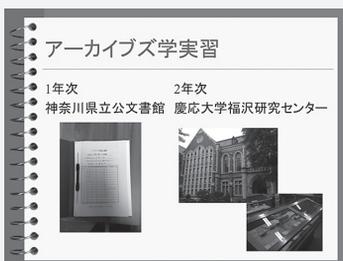
GWが終わると5月にはアーカイブズ機関実習の案内が始まり、夏休み前に宿泊を伴う国内研修があります。初年度はおおよそ夏休み期間中に、機関実習が行われます。期間は10日から2週間程度で、初年度は割り当て、2年次は



- 大学院への進学を考える
1. 留学経験 1998年6月-1999年8月
言語の習得 視野の広がり
 2. 生涯学び続ける時代
 - ・ 問いかけ
 - ・ 時代が提供する技術
 - ・ 要求される技能



1. 史料室の目的
- 恵泉女学園創立以来の学園に関する史料を調査、収集、整理、保管して、学園内外の教育活動・研究に役立てることを目的とする。(史料室規程)
- 「時代によって見えにくくなったりもしているが、流れをきちんと捉えよう。恵泉の新しい歴史に加わる生徒たちに、学生たちに、先生たちに、職員たちに、流れを伝えて行くのではないか」1993年
学園長 秋田稔



- IV 現在の仕事に活かされていること
- ✓ 1. 理論・演習
 - ✓ 体系的性・全体性への視点
 - ✓ 2. 保存論
 - ✓ 収蔵史料の維持管理
 - ✓ 保存・修復の理念と保存方針の策定
 - ✓ 3. 実習体験
 - ✓ 職場環境の見直し

修士論文の内容に合わせて自己開拓する例が多いと思います。秋には国外での研修旅行があり、1年生には費用の補助があります。年度内には修論のテーマを決めます。

2年次は、6月に中間報告、11月に最終報告、1月の冬休み明けに論文提出。このスケジュールで、間に機関実習があります。実感としてかなり忙しく、この間の授業で課せられる課題やレポートは、できる限り修論のテーマに結び付けていくなどの工夫が必要です。

次にアーカイブズ機関実習についてです。私は、1年次に神奈川県立公文書館、2年次は自己開拓で慶應義塾大学の福澤研究センターで行いました。写真(左スライド5枚目)は提出した実習日誌ですが、12日間の出勤簿が表になっています。左側は三田キャンパスで、センターが入っている旧図書館と、高校の図書館にある『学問のすすめ』の初版本などが展示されているコーナーです。それぞれ、実績の豊富な歴史ある組織による受け入れて、緊張し、時間と労力を要しました。大変でしたが、非常によい経験をさせていただきました。

資料調査に関しては、在学中に参加できた調査活動のうち、島根県と広島県の県境に近い、島根県飯南町の調査が印象深い経験でした。これはアーカイブズ学専攻が島根大学、飯南町役場と協力して数年をかけて調査しているもので、各学校、団体から学生や役場の職員のボランティアが集まり、合宿形式で行われています。私が参加した2011年度が初年度で、まず旧役場の蔵から史料を選び出すところから始まり、4日目に内容目録を採るところまででしたが、史料の扱い方や目録の採り方などの基本的な作業から、数年がかりの調査の計画全体をアーカイブズ学専攻の院生がリードを取って行うなど、調査の進め方まで、ひとつひとつがよい勉強になりました。

これらの、実習や調査の経験は、アーカイブズ学の理論に裏づけされて行われていること、あるいはそれに照らして考え直してみることが重要で、そのことによって、単なる技術論にとどまらず技術の裏づけとなる理論を構築していくことができるものだと考えます。

次に修士論文についてです。修士論文は、そのような具体的な資料群を前に、その公開・利用までの過程について、様々な切り口から理論化して行く作業だと思います。わたしは入学時に提出した論文テーマを変更し、2年目から職場で取り扱っている史料を対象として取り組みました。業務との兼ね合いで悩むこともありましたが、結果的には自分が直接手で

触れられる資料を修論のテーマにしてよかったと思います。

(修士論文テーマ)

私立学校における記録史料の保存と活用 ― 短大史編纂を契機として

演習や、調査、実習を通して具体的な資料群の整理をいくつか経験するなかで徐々にわかるようになったことですが、まだまだ普遍的な理論が構築されているわけではありませんから、修論の執筆にあたっては試行錯誤するしかないという状況があると思います。また、ひとつの結論を導こうとする際にも、暫定的な推論として書くしかなく、論の構築は長いスパンで取り組んでいくというような修了生も多いと思います。先が見えずに苦むこともあります、取り組む価値のあるチャレンジです、そのことが日本のアーカイブズ学の底上げにつながっていくと感ずることができるのも、学習院ならではの醍醐味ではないでしょうか。

4 ―― アーカイブズ学を大学院で学ぶ

最近同じ職種の人々との会合などに出ると、「学習院で学んでどうでしたか」と聞かれることが多くなりました。アーカイブズ学に対して関心が高まっていることを肌で感じます。「実際に立つことはありますか?」とやや否定的に尋ねられることもあります。しかし、答えに窮することはありません。保存などの技術的な話はわかりやすいので、そのような内容で答えることもあります、改めて自分自身に問い直してみると、次のようにまとめられるでしょうか。

現在の仕事に活かされていること

1. 理論・演習
体系性・全体性への視点
2. 保存論
収蔵資料の維持管理
保存・修復の理念と保存方針の策定
3. 実習体験
職場環境の見直し

まず第一に強調したいのは、全体性への視点が身についたということです。これは、実際にいろいろな調査に取り掛かる場合に、まずは段階的な調査を想定するわけですが、それを行う前提として大切なことです。各論は様々ありますが、アー

カイブズ学の視点として、組織、あるいは個人の活動の全体を幅広く捉え、体系性と全体性の担保が必要であることを理論的に学んでいることは財産となっていると思います。

第二に、理論としてよりも技術的なところですが、収蔵資料の維持管理に関する実際的な知識と、計画性、方針をもった資料管理の考え方は、予算申請などの具体的なところで話に説得力を持たせる力となっています。

第三に私の場合、あちこちの資料保存機関に見学に行くと、そのことが職場環境の見直しにつながります。各々の機関は人数や予算などサイズも様々ですが、目の付け所やちょっとした工夫に気がつくと嬉しいものです。現場の日常業務のなかでは、もう少し研究を進めて、資料保存を公開までのシステムとして確立させて行く努力が必要とされているところでは

まだ少し時間に余裕があるようですので、大学院への進学について少し考えているところをお話したいと思います。私は30代の半ばで1年間留学の機会がありました。学校の職員として在職しながら国外研修に出していただいたのですが、それによって視野が大変広がりました。多様な国々からの留学生との交流、特に南米や東欧の学生との交流はかけがえのない経験となりました。またこの間、不十分ながら語学の習得ができたことは大学院への進学を後押ししています。現代社会は、技術革新をはじめ様々な形で変化を続け、若い人のみならず年齢を重ねても、職場においてそれらを活用するために、また変化する時代に対応するために、研修や学びが日々要求されています。職場を離れた場面でも人生を問い、役割や生きる意味を求めて思索することも必要でしょう。現代は、個人が学校を卒業してからも生涯学び続ける意識を持つことが必要な時代ではないでしょうか。職場が提供する研修などの機会もありますが、自分なりの人生の歩みにおいて、出会うチャレンジに勇気をもって取り組んでみることも、意味のあることだと思います。それによってひとりひとり、より豊かな人生を目指していくことができるのではないかと思います。

長い時間、ご清聴いただき、ありがとうございました。

1 ―― この報告は、2013年10月26日(土)に開催された入試説明会に伴う講演会「働きながらアーカイブズ学を学びませんか? ―― アーキビストを目指して」の記録である。報告者は2012年3月に博士前期課程を修了。